

研究成果報告書

(国立情報学研究所の民間助成研究成果概要データベース・登録原稿)

研究テーマ (和文) AB		北東アジアの越境環境協力を再考する—協力促進の阻害要因に関する比較分析			
研究テーマ (欧文) AZ		Reappraisal of Transboundary Environmental Co-operation in North-East Asia: Comparative analysis of Negative Factors in Enhancing Regional Co-operation			
研究氏代表名者	かたかな CC	姓) コヤノ	名) マリ	研究期間 B	2012 ~ 2014 年
	漢字 CB	児矢野	マリ	報告年度 YR	2014年
	ローマ字 CZ	Koyano	Mari	研究機関名	北海道大学 大学院法学研究科
研究代表者 CD 所属機関・職名		北海道大学 大学院法学研究科 教授			
<p>概要 EA (600字~800字程度にまとめてください。)</p> <p>本研究は、北東アジアにおける越境環境協力の遅れを打破すべく、その現状を検証し、日本の環境外交という戦略的視点から実践的にも有意義な理論の構築と、それを踏まえた政策提言案の作成をめざした。具体的には、昨今注目を浴びている PM2.5 問題に焦点を当て、日本主導の東アジア酸性雨モニタリングネットワーク (EANET)、韓国主導の長距離越境大気汚染プロジェクト (LTP)、欧州地域で歴史の長い長距離越境大気汚染条約と追加議定書、アジア地域唯一の多数国間大気関連条約の ASEAN 煙霧協定等を参照し、また、北東アジア地域における中韓等の二国間協力の最新動向も視野に入れつつ、国際法学、国際関係論及び科学技術論という多角的視点を組み合わせた学際的なアプローチにより、有効な対処策に関する学術的分析とともに、それを踏まえた実践的な政策提言案の作成を追求した。</p> <p>具体的には、合計 6 回の全体会合・集中合宿・国際ワークショップへの参加 (2012 年 12 月：東京、13 年 1 月：京都・国際ワークショップへの参加 (その成果は添付資料参照)、8 月：北海道合宿、12 月：東京、14 年 3 月：東京、7 月：島根合宿)、2 回の個別勉強会 (2014 年 8 月：東京、9 月：福岡)、1 回の海外調査 (2014 年 6 月：韓国) を開催し、国際機関の実務担当者・海外研究者との意見交換、関係諸国として特に韓国政府・関係研究機関のインタビュー調査等も経て、先行研究レビュー、分析手法・枠組の設定、既存枠組・ツールの実態調査・有効性分析、試案の作成と検証を、精力的に行った。また、共同作業を進める過程で、メンバー各自が関連学会等で東・北東アジアの越境環境協力に関連する研究成果の報告を行い、雑誌等に関連論文等を発表した (本報告書内「発表文献」、本報告書別添リスト及び添付コピーを参照)。そして、その結果も共同作業にフィードバックする形で、効率的に作業を進めた。</p> <p>上記共同作業の最終成果として、現状の緻密な検証と最新の動向を踏まえた政策提言案をまとめ (「PM2.5 に対処しつつ東アジアの緊張緩和を図るための外交戦略」(仮)：本報告書に添付)、現在、その改訂作業を進めている。ここでは、国際環境協力における積極的な 2 つの側面—①地域の環境問題それ自体の解決を促す、②安全保障面における地域の緊張緩和の足がかりとなり、関係国間で緊張が高まった際の「安全弁」となりうる—に着目して、北東アジア地域の PM2.5 問題を解決するための環境外交における具体的な戦略—既存の諸枠組の有効性分析を踏まえ、それらを再定義し巧みに組み合わせて展開させ、現実的かつ合理的なガバナンス体制を構築するための道筋等—を示している。</p> <p>本年度内には、上記政策提言案の最終版を完成させ、英・韓・中の言語に翻訳し、関係国際機関、関係各国の政府機関、研究機関、研究者、関係団体、市民等、社会に対して発信する予定である。政策提言として効果的な形で発表すべく、現在、刊行媒体についても検討している。政策提言文書の刊行を貴財団助成の研究期間内に完遂できなかったのは、2014 年 5 月末の中韓間の首脳会談を通じて PM2.5 に関する中韓二国間協力が急速に展開したため、そうした最新の動向を踏まえて研究成果を創出しようとし、当初の想定よりも実際の作業に時間を要したからである。しかし、逆にそのような最新の動向の丁寧な分析・検証を作業の含むことができたため、最終的な研究成果は、当初の想定よりも質の高いものとなった。全体として、当初計画よりも有益な研究成果を上げることができた。</p>					
キーワード FA	北東アジア	越境大気汚染	PM2.5	環境外交	

(以下は記入しないでください。)

助成財団コード TA				研究課題番号 AA							
研究機関番号 AC				シート番号							

発表文献（この研究を発表した雑誌・図書について記入してください。）*別添リストも参照。									
政策提言	文献標題 <sup>GB</sup>	政策提言—PM2.5に対処しつつ東アジアの緊張緩和を図るための外交戦略							
	著者名 <sup>GA</sup>	石井敦、米本昌平、 児矢野マリ、沖村 理史、大久保彩子、 堀口健夫	雑誌名 <sup>GC</sup>	ネット配信、紙媒体への刊行も含め、現在、効果的な形での発表方法について検討中。					
	ページ <sup>GF</sup>	全11頁	作成年 <sup>GE</sup>	2	0	1	4	巻号 <sup>GD</sup>	
雑誌	論文標題 <sup>GB</sup>	日・中を含む北東アジア地域の環境問題の解決のため、国際法は役に立つのか—国際法・国際法学の限界と可能性							
	著者名 <sup>GA</sup>	児矢野マリ	雑誌名 <sup>GC</sup>	北大法学論集					
	ページ <sup>GF</sup>	in press	発行年 <sup>GE</sup>	2	0	1	5	巻号 <sup>GD</sup>	65巻5・6号
雑誌	論文標題 <sup>GB</sup>	北東アジアにおける国際環境問題と地域協力							
	著者名 <sup>GA</sup>	沖村理史	雑誌名 <sup>GC</sup>	環境法政策学会誌					
	ページ <sup>GF</sup>	in press	発行年 <sup>GE</sup>	2	0	1	5	巻号 <sup>GD</sup>	18号
図書	著者名 <sup>HA</sup>	J.Balsiger & A.Uyar (eds.)							
	書名 <sup>HC</sup>	Comparing Regional Environmental Governance in East Asia and Europe (EE-REG), 24-25 January 2013, Kyoto, Japan: Proceedings							
	出版者 <sup>HB</sup>	Research Institute for Humanity and Nature	発行年 <sup>HD</sup>	2	0	1	3	総ページ <sup>HE</sup>	107
<p>欧文概要<sup>EZ</sup></p> <p>This research project aimed at constructing a theory for regional environmental co-operation in North-East Asia and at making a policy-proposal on Japanese environmental diplomacy for promoting the regional environmental protection. Focus was put on issues of PM 2.5 in the region. Thorough analysis was made on existing international frameworks for dealing with air pollution, such as the East-Asian Network on Acid Rain, <i>i.e.</i> EANET, initiated by the Japanese Government, the Long-range Transboundary Air Pollution Project, namely LTP, prompted by the Government of Republic of Korea (ROK), the UNECE Convention on Long-range Transboundary Air Pollution and its protocols, the ASEAN Haze Agreement, <i>etc.</i> Bilateral co-operation, particularly between China and ROK, was also examined, since its current development would be a key to managing PM 2.5 problems in the region. Various kinds of approaches were combined in the research from the viewpoint of international law, international relations and studies on science and technology.</p> <p>Significant outcome was produced by the project, including various articles published, or being published, by each of the project members, a paper of policy-proposal, provisionally titled, "Diplomatic Strategy both for managing PM 2.5 problems and for relaxing political tension in North-East Asia" and so on. The paper emphasized two functional elements of international environmental co-operation, <i>i.e.</i> solving regional environmental problems and providing a key to the relaxation of regional tension or "a safety valve" at the peak of the tension in security. Based on analysis of effectiveness of existing various frameworks and political dialogues, the paper constructed a model for governance on environmental co-operation in North-East Asia and suggested a strategy that include a path by which the model is to be realized in the future.</p> <p>The policy paper has currently been revised thoroughly. Being published in Japanese, English, Chinese, Korean and Russia by the end of March 2015, it is to be sent to each government of all North-East Asian States, relevant international organizations, various research institutions, academia, other institutions, <i>etc.</i></p>									